



**Data** 2023-19

監督：河毛俊作  
 脚本：大森寿美男  
 エグゼクティブ・プロデューサー：宮川朋之  
 原作：池波正太郎  
 出演：豊川悦司／片岡愛之助／菅野美穂／天海祐希／柳葉敏郎／早乙女太一／高畑淳子／小林薫／小野了／中村ゆり／石丸謙二郎／でんでん／鷲尾真知子／田中奏生／田山涼成／板尾創路

## 👁️👁️ みどころ

池波正太郎の“生誕100周年記念作品”として、「時代劇、新時代。」がスクリーン用の本格的時代劇を。信長＝レジェンド＝木村拓哉とは違って、梅安役の豊川悦司はベストチョイス！

起り→蔓→仕掛人、という“仕掛の流れ”は面白いし、“殺しのテクニク”も絶妙。また、弁護士には“双方代理の禁止”のルールがあるが、仕掛人に嚴禁のルールとは？

主な舞台は料理屋・万七だが、天海祐希扮する、その内儀の思惑は？正体は？そして、あっと驚くその出自は？

『レジェンド・アンド・パタフライ』（23年）とは異なり、観客は老人ばかりだが、興行収入の比較は如何に？

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

### ■□■あなたは司馬遼太郎派？それとも池波正太郎派？□■

2023年は日本代表する2人の作家が“生誕100周年”を迎えた。一人は司馬遼太郎、1923年8月7日生まれ、もう一人は池波正太郎、1923年1月25日生まれだ。

2022年秋に、公益財団法人司馬遼太郎記念財団が、全国の読者を対象に好きな司馬遼太郎作品をインターネットでアンケートを実施したところ、そのベスト10は次のとおりになった。

1位	『坂の上の雲』	6位	『花神』
2位	『竜馬がゆく』	7位	『国盗り物語』
3位	『燃えよ剣』	8位	『菜の花の沖』
4位	『街道をゆく』	9位	『関ヶ原』
5位	『峠』	10位	『世に棲む日日』

それに対して、池波正太郎は、『仕掛人・藤枝梅安』『鬼平犯科帳』『剣客商売』の三大シリーズを代表とする時代小説の第一人者だ。

『坂の上の雲』は、「映画化やTVドラマ化はしてほしくない」と司馬本人が語っていたこともあって長い間映像化されなかったが、NHKの“スペシャルドラマ”として、2009年、2010年、2011年の3年間にわたって、3部構成・全13回で放映された。それに対して、池波正太郎作品については、日本映画放送エグゼクティブ・プロデューサーの宮川朋之氏を中心として立ち上げられた「時代劇、新時代。」が、2011年より、池波正太郎原作の「鬼平外伝」シリーズなど20作品を超えるオリジナル時代劇の製作を続けてきたが、今般、その延長として、「仕掛人・藤枝梅安」時代劇パートナーズの企画として、『仕掛人・藤枝梅安』第1部、第2部を公開することに。昨今の邦画は、青春モノ、恋愛モノ、そしてアニメを中心とした（くだらない）ものが多いが、こんな企画の成否はさて？

そんな興味で本作を鑑賞したが、見事に観客は、老人ばかりで、若者は誰一人もいなかった。黒澤時代劇の見事さとは比べるべくもないが、本作の時代劇としての出来栄はそれなりのもの。Z世代の若者向けの企画である『レジェンド&バタフライ』（23年）に比べれば、その出来の違いは明白だ。しかし、内容の是非ではなく、興行面で比べると、大ヒットしている『レジェンド&バタフライ』に比べて、本作は？

## ■□■歴代の梅安役は？本作の豊川悦司はベストチョイス！■□■

正直言って、私は池波正太郎の『仕掛人・藤枝梅安』シリーズと、藤田まことが1979年以降、長い間主演してきた『必殺仕事人』シリーズとの区別がついていなかった。『必殺仕事人』シリーズにおける中村主水役はずっと藤田まことが演じてきたのに対し、『仕掛人・藤枝梅安』シリーズにおける歴代の梅安役は次のとおりだ。

過去の映像化変遷		
1972年	TV 「必殺仕掛人」	緒形拳
1973年	映画 「必殺仕掛人」	田宮二郎
1973年	映画 「必殺仕掛人 梅安蟻地獄」	緒形拳
1974年	映画 「必殺仕掛人 春雪仕掛針」	緒形拳
1981年	映画 「仕掛人梅安」	萬屋錦之介
1982年	TV 「仕掛人・藤枝梅安」	小林桂樹
1990年	TV 「仕掛人 藤枝梅安」	渡辺謙
2006年	TV 「仕掛人 藤枝梅安」	岸谷五朗
2023年	映画 「仕掛人・藤枝梅安」	豊川悦司
	映画 「仕掛人・藤枝梅安2」二作連続 公開	

【『仕掛人・藤枝梅安』パンフレットより】

本作の梅安役は豊川悦司になったが、それは彼が大柄で原作のイメージに近く、人間の陰と陽を絶妙なバランスで表現できると判断されたため。そんなオファーを受けて、子供の頃から作品の大ファンだったという彼も快諾したそう。私は、『12人の優しい日本人』（91年）で、陪審員の一人として出演し、絶妙の存在感を見せていた俳優、豊川悦司が強く印象に残っている（『弁護士目での映画評論』その4 陪審映画あれこれ（『シネマ1』121頁））が、彼のその後の約30年間の活躍は目覚ましい。多方面で活躍し続けている日本の俳優のトップ2は役所広司と渡辺謙だが、トヨエツこと豊川悦司はそれに次ぐ第3位かも！？そう考えると豊川悦司はベストチョイス！さあ、豊川悦司は、先輩の緒形拳、田宮二郎、渡辺謙たちに負けじと、本作でどんな梅安を？

## ■□■仕掛とは？仕掛人とは？仕掛の流れは？■□■

弁護士の使命は、「弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする。」（弁護士法1条1項）であり、弁護士の職務は、「弁護士は、当事者その他関係人の依頼又は官公署の委嘱によつて、訴訟事件、非訟事件及び審査請求、再調査の請求、再審査請求等行政庁に対する不服申立事件に関する行為その他一般の法律事務を行うことを職務とする。」（同法3条1項）、とされている。具体的には、刑事事件では、被疑者、被告人の“弁護士”として、民事事件では依頼人、依頼者の“代理人”としてさまざまな法律行為を行うことになる。

それに対して、仕掛の流れは、①起り（おこり）（“蔓”と呼ばれる仲介人に代金と標的、事情を説明し、殺しを依頼する者）からの依頼を受けて、②蔓（つる）（難易度や状況など、依頼の内容にあった“仕掛人”を選び、殺しの依頼を持ち込む者）が仕掛人に依頼をし、③仕掛人（“蔓”から依頼を受け、標的を暗殺する。報酬の半分を前金で受け取り、仕掛後残りの半分を受け取る。）が標的を暗殺する、ということになる。

私は1974年に弁護士登録をしたが、2001年からは『SHOW-HEY シネマルーム 2足のわらじを履きたくて』を出版し、弁護士と映画評論家の“2足のわらじ”を履いてきた。それと同じように、梅安も2つの顔があったようだ。つまり、腕の良い鍼医者としての顔と、“蔓”と呼ばれる裏家業の元締から金をもらって、生かしておいては為にならない奴らに闇に葬る冷酷な“仕掛人”の裏の顔だ。なるほど、なるほど。

しかし、暗殺という仕掛人の仕事は、それ自体違法なものだ。池波正太郎の『仕掛人・藤枝梅安』シリーズにおける主張のポイントは、たしかに殺しは悪いことだが、仕掛は必要悪だ、ということだ。パンフレットの中で、河毛俊作監督は、「人間は善いことをする傍らで悪いこともする。悪も含めて人間である。登場人物の人生を映画の中に焼きつけた。」と書いていることから、それがよくわかる。しかし、その主張の当否は？

## ■□■殺しのテクニックあれこれ！“鍼”VS“楊枝”■□■

『必殺仕事人』シリーズで藤田まことが演じた中村主水は同心（＝武士）だったから、彼の武器は刀だった。しかし、梅安は鍼医者だから、彼が裏の顔になって殺しを行う時に

使う武器は、表の顔の時に使うのと同じ“鍼”。私は昔からマッサージとサウナは大好きだったが、お灸と鍼は怖くて試したことがなかった。しかし、40歳代のある時、近所の鍼医者に恐々鍼を打ってもらおうと気持ち良かったので、以降やみつきになってしまった。しかし、不幸にもその人が亡くなってしまった後は、いい鍼医者に巡り会っていない。もし梅安のような腕のいい鍼医者に巡り合えば、即やってもらおうのだが・・・。

それはともかく「バカとハサミは使しよう」というが、刀も使しよう、そして、鍼も使しようということだ。他方、梅安の相棒の仕掛人が楊枝作りの職人、彦次郎（片岡愛之助）だが、彼の武器はその楊枝。しかし、楊枝でどうやって人を殺すの？

『仕掛人・藤枝梅安』シリーズや『必殺仕事人』シリーズでは、“殺しのテクニックあれこれ”が大きな見どころになるが、彦次郎のそれはちょっと無理筋。あんなおもちやのような吹き矢(?)で、本当に人が殺せるの？それに対して、梅安の鍼の使い方はお見事！本作では、彼がさまざまなシークエンスで鍼を使った殺しのテクニックを披露してくれるので、それをしっかり堪能したい。

## ■□■主な舞台は料理屋の万七。内儀の思惑は？その正体は？■□■

本作の主な舞台は料理屋・万七になる。導入部で、梅安が見事な仕掛けを見せた後、“蔓”である羽沢の嘉兵衛（柳葉敏郎）から、料理屋・万七の内儀おみの（天海祐希）の“仕掛け”を依頼されることから本作の本格的ストーリーが始まっていく。仕掛人は前述のルートに従って蔓からの依頼を受け、カネ（前金）を受け取れば、直ちにターゲットを殺すだけの話だが、3年前に万七の前の内儀を仕掛けたのは他ならぬ梅安だったから、アレレ。万七の主人、善四郎（田山涼成）の前の内儀おしずけに続いて、おしずけの死後、万七の内儀に収まっているおみのも梅安が殺すの？

こりゃ何か裏があるのでは？そう考えた梅安が万七の女中、おもん（菅野美穂）と深い仲になり、店の内情を探り出すと、あるわ、あるわ、怪しげな情報が次々と。おもんの話では、おしずけの死後、おみのが内儀になってから、古参の奉公人たちが次々と去り、店の評判を落としているのに、儲けだけはあがっているらしい。そのカラクリは、どうやら、おみのが店に見栄えのいい娘を女中として雇い入れ、客を取らせていることにあるようだから、要するにこりゃ“売春”。梅安を上客とみたおみのは、梅安にも「もしお望みなら・・・」と女中紹介のモーションをかけてきたが、この内儀の思惑は？その正体は？

宝塚歌劇団退団後の天海祐希の活躍は多岐に渡っているが、本作に見るおみのは善人？それとも悪人？本作では、仕掛け人、藤枝梅安と同じように、おみのについても、その複雑なキャラが興味深い上、後半からはあっと驚く彼女の“出自の秘密”も明かされてくるので、それに注目！

## ■□■“起り”の身元調査は厳禁！仕掛人 VS 弁護士は？■□■

前述の「仕掛けの流れ」通り、仕掛人は“蔓”からの依頼で動くものだから、仕掛人が“起り”（依頼人）の身元調査をすることは厳禁。殺しの依頼にはそれ相応の理由があるは

ずだから、それをいちいち質問されたのでは、“蔓”も“起り”もかなわない、ということだ。すると、仕掛人は“蔓”からの依頼を必ず引き受けなければならないの？「あいつを殺すのは嫌だ」と断ることはできないの？ちなみに、日本では医師が患者の治療を拒否することは厳禁だが、弁護士が依頼者の依頼を断るのは自由。どれだけカネを積まれても、「そんな仕事は嫌だ」と思えば拒否することができる。

他方、弁護士特有のルールとして、“双方代理の禁止”がある（民法第108条、弁護士法25条）。これは、弁護士は交通事故の被害者側の依頼を受けるのも、加害者側（その実質は損害保険会社）の依頼を受けるのも自由だが、1つの交通事故について被害者側と加害者側双方の委任を受けるのはダメということ。それを許せば、弁護士のハラ1つでどうにでも賠償金の額を調整することができる上、弁護士は双方から報酬をもらうので、まさに“濡れ手で粟”を許してしまうことになってしまう。仕掛人には弁護士と同じような“双方代理の禁止”のルールがあるわけではないが、ひょっとして、おしず殺しの依頼人はおみのだったの？そう考えれば、おしずの後釜におみのが収まり、今や病床に伏す善四郎に代わって、万七の実権を一手に握っているおみのの姿に納得ができる。そう考えた梅安は、殺しの“起り”（依頼人）の身元を探るのは、仕掛人の掟に反すると知りながら、3年前に万七の女房おしずを仕掛けたいきさつを知りたいと思い始めることに。

今の東京は広くて人口も多いが、梅安が生きた時代の江戸はまだまだ狭い。そんな狭い町の中で、ドロドロに混じり合った人間関係が見えてくる中、梅安が真にやるべきことは一体ナニ？真に仕掛けるべき相手は誰？そんな風に、本作中盤以降の梅安の活躍をしっかりと見つけていきたい。

2023（令和5）年2月10日記